北総の里

発行日 2015. 2. 4
第 229 号
（第1回発行 1974年4月1日）
発行所　北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました！

施設の概要や理念，利用者の様子，園長からのお知らせ等，盛りだくさん！ぜひアクセスしてみて下さい。

ホームページアドレス
http://www.hokuso-ikuseien.org/

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp

特集「いのち、こころ、ことばを一つに」

〈近藤原理〉

一期一会一輪の花

〝野の花〟こそ最高のオンブズマン

よく見れば　なずな花咲く
垣根かな

山路来て　なにやらゆかし
すみれ草

日本の国は温暖で四季の変化を抱えた豊かな自然に恵まれた国。そんなことで古来より自然を畏敬し自然を愛で自然に謙虚に向き合う暮らしと文化が醸成され、それは今の世に続きます。上記は江戸時代の俳人芭蕉の句。人知れず咲く〝野の花（なずな・すみれ）〟に心を寄せる芭蕉さんの情緒（日本人の精神）をこの句から読みとることができます。安土桃山の世に成立し今に伝わる華道や茶道も突き詰めると、そんな日本の風土の中で成立した自然と人との調和（侘・寂）を探る芸道。その創始者、千利休は「一期一会」（生涯にただ一度まみえること）という言葉をその芸道の中で探し出しました。〝私達の毎日の暮らしも同じに見えて同じことは一つもない。毎日が新しい出会い。その日その日を一期一会の謙虚な心で生きていこう。〟利休の一期一会の心とはそんなことでしょうか。その〝一期一会〟という言葉に、〝一輪の花〟を足して〝一期一会一輪の花〟という言葉を、当園ではこの人達を大切にする〝精神〟として拘ってきました。そのことについて少し話をしてみたいと思います。

この人達の居室に花を飾る。〝一期一会一輪の花〟とは各個室の一輪ざしに生けられた一輪の花のことを指します。しかも、その花は花屋さんで買ってきたバラやダリア等の立派な花である必要はありません。でも、造花は絶対にダメ。園の周り、家の周りにも名もなく咲いている〝野の花〟。その花こそこの人達の個室によく似合うのです。支援職員は出勤時、家の周りに咲いている名前も知らない〝野の花〟を摘んで持参し各居室の一輪ざしに飾ります。そして〝今日も一生懸命この人達によく寄り添います〟と心に誓うのです。元気に利用者と挨拶を交わし、利用者のロッカーや衣類の手入れを怠らない。毎日のお勤めです。〝一期一会一輪の花〟の心とは、〝毎日の仕事に慣れないで、その日一日を謙虚にこの人達の障害に向き合うぞ〟という意味。

▲一期一会一輪の花。
“一輪の花に見守られる幸せ”

難しい専門用語の羅列をして、この人達の人権・権利を言ってもそれは抽象にすぎません。サブタイトルで〝野の花こそ最高のオンブズマン〟と書きましたが、この一輪の花を大切に継続することは簡単なようで案外難しいのです。複数担任のチームプレイでそれは守られるのですが「誰かやるだろう」「今日はまあいいか」の気持ちで仕事に入った時、それが一人ならいいのですが複数であった場合、一輪の花は萎えて枯れて放置されます。逆にそれがよいチームであれば一輪の花は長く良い状態を保ちます。同じことを何度も口にしますが、〝野の花〟はよく見ると本当に健気に美しく咲いています。

〝野の花〟、それはどこかこの人達の生きざまと重なります。そして、「きれいに咲いているね」と声をかけるとその花はもう一週間長持ちするそうです。利用者の命と向き合うこの仕事。〝野の花〟を慈しむ心はこの人達に細やかに寄り添う技術を研きます。〝野の花〟こそ最高のオンブズマン。これが北総精神。（武井）

姉妹交流

長崎の姉 コスモス会来園

去る11月26～27日と、長崎の姉、コスモス会の皆様が北総を訪ねて下さいました。限られた短い時間ではありましたが、歓迎交流会を開催し親睦を深める事ができました。また、2日目にはバリアフリー新棟や作業の様子を見て頂きました。姉妹結縁から23年。お互い「働くこと生きること」を基本理念とし、切磋琢磨し合いながら絆を深めてきました。今回、北総を訪ねて下さった荒田さん、石崎さんより感想を寄せて頂きましたので紹介します。

❖北総育成園を訪ねて

荒田　一剛

先日は、ご多忙中にも関わらず丁寧なご指導を頂き、ありがとうございました。

九州の西の端より慣れない東京に到り、不安も大きかったのですが、武井園長先生直々に迎えに来て頂き、恐縮すると同時に「もう大丈夫」と安心致しました。北総育成園に着くと、職員の皆様、利用者の皆様より盛大で温かいお出迎えを頂き、少し照れ臭いながらも大変嬉しく思いました。園の中も見学させて頂きましたが、「一輪の花」を以前と変わらず実践されているのを拝見し、花一本にも心を込める職員の方々の姿勢とその継続力に、我々には足りないものを強く感じました。

鯉屋旅館では、武井園長先生より頂いた挨拶の中にもありました「姉妹提携23年」の言葉に、改めて驚きとお互いの絆の深さを感じました。その23年間もただ続けるだけでなく、常に切磋琢磨し、お互い成長を続けて現在の私たちの職場があるのだと考えると、このお互いの関係を今後も途切れさせる事無く成長を続けていかなければならないと思っています。又、仕事の話だけでなく、真面目な話からくだけた話まで、酒を酌み交わしながら腹を割って話せた事、非常に嬉しくまた貴重な体験をさせて頂いたと感じています。

2日目には各作業班を見学させて頂きました。特に印象に残っているのは林産班で、自分たちで山を切り開き、道も作ったとの話を聞き、皆さんの額に汗して働く姿が思い浮かばれ、感激致しました。山の一部には城跡があり、ここも荒れ果てていたところを地元の方々の為に恩返しが出来ないかと整備され、立派な広場が出来ていました。地域への感謝を忘れず、貢献を実践されている事は、私たち福祉人が一番見習わなければならない所であり、社会福祉法人のあるべき姿だと思いました。園芸班では東京の市場にも花を出されているとの事で、福祉分野のみならずその営業力と、他事業者や農家の方々との関係作りは、我々が課題としている所で、ぜひ学ばせて頂きたいと思っています。

しかし何よりも、作業されている利用者の皆さんの表情、活き活きとした目を見ると、職員の皆さんがいかに愛情を持って、誠実に支援に当たられているか良く分かり、「ほんもの」の仕事を見せて頂きました。私たちも利用者さん方がこのような表情で活動できるよう、支援に努めたいと思います。

▲バリアフリー新棟での歓迎会。年に一度の交流だが、温かい姉妹の絆は年々深まり、会えば途端に笑顔の花が咲く。H26.11.26

有意義な時間というものは有意義であるほどに早く過ぎるもので、あっという間の時間でした。北総育成園の皆様から学ぶことは、2日間では全く足りない程多く、名残り惜しくもありましたが、今後も両園の絆を深めさせて頂けるのであれば、ひとまずは今回学んだ事を持ち帰り支援に活かしていきます。そして又、北総育成園の皆様に来訪して頂く事を、さらには次回また訪問させて頂くことを今から楽しみにしておりますので宜しくお願い致します。

❖一輪の花

石崎稚佳子

先日は、ご多忙の中にもかかわらず丁寧な御指導いただき、誠にありがとうございました。私以外のメンバーは、何度か訪問した事があり、初めて訪れたのが私一人であった為、とても緊張しました。到着後の歓迎会では、利用者様の数に圧倒されながらも一人ひとりの眼差しがとても温かく感じられとても嬉しかったです。その後、利用者様の生活空間を見学させて頂きました。隅々まで整理整頓されており、生活空間のいたる所に花が飾られていました。どの花もみずみずしく元気に咲いていました。私は、武井園長先生はじ

め北総育成園の皆様が大切になさっている〝一期一会一輪の花〟この言葉を頭に思い浮かべました。人は、日々変化します。一輪の花の変化に気付く様、利用者の変化にも気付き、二度とは無いこの瞬間を共に考え生きていこう。私は、〝一期一会一輪の花〟に、このような意味が込められている様に感じられます。一輪の花は、利用者様がいる部屋には必ず飾られてあり、そのどれもが美しく、北総育成園の皆様の思いが表れている様に見えました。訪問後、今の自分は、利用者の方々の日々の変化に気付けているのだろうか…。「忙しい。」その一言で片付けていないだろうか。今一度自分自身の行っている支援内容を振り返る良い機会になりました。

　おかげ様で、利用者支援への意識が一層に高まり、理解を深める事ができました。今後は、この経験を大いに活かし、精励して参る所存でございます。最後に、20年来にわたり姉妹提携施設として交流を深めさせて頂いた事で、このような有意義な時間を過ごさせて頂き心より感謝申し上げます。これからも末長く友好関係を続けていきたいと思いますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

祝10回！ 太巻き寿司教室開催

▲出来上がった太巻き寿司を前に。10回目の開催を記念し先生方が「祝」の字の太巻き寿司を巻いて下さった。温かいお心遣いに感謝。H26.12.16

　去る12月16日、千葉県栄養士会の重鎮である龍崎先生を始め千葉伝統郷土料理研究会の先生方、総勢13名がご来園頂き、太巻き寿司教室を開催して下さいました。

　今年で10回目を数えるこの太巻き寿司教室。千葉県に古くから伝わる郷土料理を自分たちの手で作る事で、先人の知恵を知り、また、食べ物＝命への感謝の気持ちを学ぶこと、即ち食育の観点も大きな意義を持っています。そして何より素晴らしいことはこの教室が10年間欠かすことなく継続されているということ。「北総で待っている利用者の為に」と龍崎先生自ら指揮をとり、今年はどんな試みをしようかと毎年取り組んで下さっています。この太巻き寿司教室を通して、改めて毎日3食の手作りの食事を用意して下さる厨房の職員の皆さんと命を頂くことに深く感謝をしていく事、龍崎先生はじめ千葉伝統郷土料理研究会の先生方が心を寄せて下さっている事を胸に置き、「また来年！」と言ってお帰りになった先生方を今後もお迎えできるよう、良い仕事を継続していきたいと思います。龍崎先生よりご寄稿頂きましたのでご紹介します。

❖郷土料理太巻きずし10周年

龍崎　英子

　早いもので北総育成園の定例行事として年末恒例の千葉の郷土料理「太巻き祭りずし」作りが去る12月16日で10回目を迎えました。

　かえりみれば笹川のこの施設を初めて訪れたとき玄関で迎えてくれた園生の皆さんの期待に満ちた笑顔は、その後も変わることなく楽しい1日の始まりとなりました。当初は些かの戸惑いも感じたものの慣れればバラの花が上手になり桃の花を巻いた年もあります。

　ただし桃の花は花弁5枚が理解し難く、当会員の指導者の元教員が、5枚は片手の指を示して理解させる方法があることを教えてくれ、さすが本職の教員と納得したものです。

　バラの花と桃の花が巻ければ、すてきなパーティーになるのは必定、当日の食卓が華やかになります。一方園の調理員の技術向上で全員の太巻き作りに船橋市花「サザンカの卵巻き」作りも恒例となりました。卵巻きは海苔巻きよりも華があり、おいしい巻きずしです。

　ここで卵焼き（クックベーカー）が必要となり、毎年この行事はあるのだからと私は鍋を贈呈しました。こうしておけば卵焼き鍋を持参せずに済むし当方も企画が楽ちん。せいぜい給食に使って焼き馴らしておいてください。

　和食が無形世界遺産となり、郷土料理が見直されています。今年は北総園の古い建物も立派な施設に変わり、東の庄城跡も皆さんの奉仕で再生しました。八方佳しとはこのことです。

　十数年前、幕張メッセ国際会議場で「知的障害者施設全国大会」が開かれ、食（給食）分野の助言者を務めたのがきっかけとなり、武井園長のご理解のもとにこの企画は今日に及びました。地元千葉テレビが放映したことも懐かしい思い出です。当時県の文化課小倉課長は「ものごとは十年続いてこそ成功といえる」と示唆されました。周囲の温かい理解と当会会員のやさしさの賜物として今後もずっと続けたいものです。

質問３　印象に残っている記事

■“街道を行く”“太田川のほとり”はいつも勉強させて頂いています！“編集後記”も大好きでその号の編集者の想いやタイムリーな情報等に、北総で働かせて頂いていた頃の情景と重ね合わせ、利用者さん達の生き生きとした姿を思い浮かべています。　**千葉県：郡司久子様**

■永らくは「街道を行く」に魅せられています。昨今は一年がかりの「須賀山城址開山」は歴史的にも大偉業で注目です。　**香取市：加瀬晃司様**

■第224号「古い上着よさようなら」が特に印象的でした。利用者さんへの心配りが素晴らしいと感じました。　**ふる里学舎アネッサデイセンター：宮崎理様**

■巻頭（表紙）の話題は毎回時宜を得、感心し拝読しています。　**武蔵野大学：深浦勇様**

■震災時みなさんが大変ご苦労された様を具体的に書かれた記事が今でも心に残っています。　**小金わかば苑：町田信行様**

■須賀山城址開山。皆の努力の結果が地元の魅力再発見につながっている。　**東庄町社会福祉協議会：相馬良男様**

■ドクダミの心。ドクダミのドは泥にまみれ努力するド、クは苦労して苦しい思いをするク…印象に残り思わずメモし、時々読み返しています。　**千葉市大宮学園ひまわりルーム：北田和代様**

■村議会だよりの「選挙報告」とても興味深く読ませて頂きました。「選挙」の熱戦が紙面から伝わってきました。　**鴨川ひかり学園：岩崎俊憲様**

■村議会だより。施設の中で長い間ずっと自治会活動を続けていらっしゃる様子。今年は誰が村長かと楽しみです。　**エルピザの里：槌屋久美子様**

■職員の方と利用者の仕事が見える「みんなの広場」は普段の職場が読み取れて良いと思います。　**スリーライト：戸田昇次様**

励まし一言メッセージ

■毎号、内容の豊かさに感心します。時に特集（小特集も含めて）を組むのも面白いと思います。ご健闘を祈ります。　**長崎なずな　近藤原理様**

■毎回、紙面からは利用者の皆さんの活動風景が臨場感豊かに表現され、皆さんの体温や息遣いが感じられるほどです。また、職員の皆さんの奮闘ぶりも、時には客観的に時には微笑ましく紹介されており、読み手を飽きさせない紙面には、素人離れしたものを感じます。　**船橋市立さざんか学園　園長　髙橋錦司様**

■送付して頂いておりますが、楽しみにじっくり見ています。本校での利用者は今のところいない状況ですが「働くこと生きること」「一輪の花」等々、私たちも考えさせられる記事が多いです。是非、これからもお送りいただけるとうれしいです。ちなみに学校の掲示板にも掲示しています。　**千葉県立東金特別支援学校　庄司由紀子様**

■北総育成園、笹川なずな工房、やまだ自然はいずれも私の好きな施設です。広報紙としての使命をこれからも果たして下さるよう期待しています。常々楽しく感動的に読ませて頂いております。　**社会福祉法人さざんか会理事　荒木直躬様**

■毎回「参考に出来る所は」と思いながら読ませて頂いています。当施設も12年目を迎え広報紙も作成しておりますがご家族への配布のみです。少しでも「北総の里」を見習っていきたいと思います。　**障害者支援施設しびらき　施設長　原田高好様**

■北総育成園の職員、利用者、保護者に対する武井施設長の感謝の気持ちが大変強く感じられます。今後ともこのような感謝の記事を多く載せて下さい。　**社会福祉法人さざんか会監事　朝岡寛彰様**

■校長、教頭ほか回覧後に職員室廊下「進路・福祉コーナー」に掲示して全職員が目にするようにしています。　**船橋市立船橋特別支援学校　校長　成田勤様**

■平和と向き合い、幅広い地域との交流をなし、生きた福祉を見るのは楽しい。いつも送って頂きありがとうございます。　**ぶりっぢ　荒井章様**

■北総育成園で長年生活されていた利用者の方が急に亡くなってしまった事を記事にしている号を見させて頂いた時、一人の利用者についてここまで記事にできる北総育成園は利用者、職員ともに家族のような深いあたたかい付き合いがあり、人を大切にする施設だということが伝わってきました。又、様々な他施設との交流や旅行記、北総の歴史を拝見することができ、いつも楽しみにしています。　**社会福祉法人心聖会　小池厚生園　庄司朋未様**

■紙面、様々なコーナーの文筆、細部にわたって職員の一人ひとりの日常的に、この仕事に、この人達に正面から向き合っている、真摯な取り組みが滲み出ております。すばらしいの一言につきる。　**大久保学園　総合施設長　中原強様**

■「新棟の灯が照らす帰り道」職員が遅くまで働いている。新しい建物に心が軽くなる。そんな情景が見えてきます。利用者さんはそんな職員に支えられ幸せだと思いました。今後も「北総の里」を楽しみにしています。　**しもふさ学園　施設長　小林勉様**

■いい仕事をしている事に敬意を表しております。近藤原理さんの色紙が園長室にあったのを思い出します。「関係の発達は無限である」。　**篠原正様**

■いつも楽しみにしております。内容もさることながら、私共としては職員への文章の書き方、伝え方を学んで欲しく、教材の一つとして活用させて頂いています。　**社会福祉法人あひるの会　あかね園　松尾公平様**

■須賀山城址の再生事業完成はビッグニュースで、東庄町にとっても何ものにも替え難い快挙です。とにかく偉い！ここがこの町の人々の心のよりどころになる事必至です。　**千葉伝統郷土料理研究会　龍崎英子様**

■20年近く「北総の里」をお送り下さり有難うございます。利用者の事を一番に考え「働くことすなわち生きること」がひしひしと伝わってきます。表紙からはじまるすべての記事がとても素晴らしく、北総で生活される皆様の息遣いが聞こえて来るようです。感謝です。　**社会福祉法人光風会　のばら園　浜走弘之様**

■いつも優れた課題をもりだくさん、敬意をもって読んでおります。いのち、しぜん、へいわ、そしてしごと。ありがとうございます。　**鹿児島　森田善博様**

■創立40周年を共に喜び、祝います。「北総の里」は毎号充実した内容であり、読むのが楽しいです。とりわけ、「村議会だより」には、心から共感し、感動しております。50周年に向けての新たな発展を心より期待しております。　**清水寛様**

■「北総の里」の記事を読み、支援員とはかくあるべきと再確認させて頂いております。今後も心温まるエピソードをたくさん紹介して下さい。　**社会福祉法人土穂会　ピア宮敷　鶴岡秀隆様**

■「北総の里」愛読し始めて20年位になります。骨太にして利用者の皆様に真摯に向き合う姿、それを世代を超えて伝えきる姿に、常々心より感心しております。　**社会福祉法人大久保学園　藤森元様**

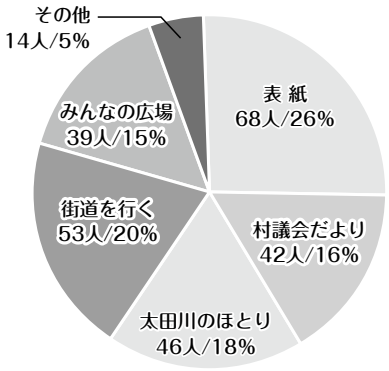
北総育成園創立40周年・広報紙「北総の里」アンケート調査実施

広報紙「北総の里」は昭和49年、北総育成園開所時に創刊されました。以降、年５回発行を基本とし40年間継続、今号で229号を数えます。北は北海道、南は沖縄県、また姉妹施設がある韓国と、全国津々浦々に発送。同じ知的障害者支援施設のみならず、特別支援学校や教育機関、日中一時支援で北総をご利用になる保護者の皆さん、地域でお世話になっている取引商店の皆さん、北総を支えて下さるボランティア団体、北総の里保護者、北総OB、そして全国にいらっしゃる武井園長のご友人の方々など、約600通毎号発送しています。

今回、創立40周年を迎え、広報紙「北総の里」に関するアンケート調査を読者の皆様に御協力頂き、率直なご意見を頂戴しました。アンケートを通して知ることが出来た「北総の里」とは？設問事項に沿って御報告致します。尚、「質問３：印象に残っている記事」と「励まし一言メッセージ」につきましては、たくさんのご意見をお寄せ頂いた中から一部を抜粋してご紹介しております。ご了承下さい。

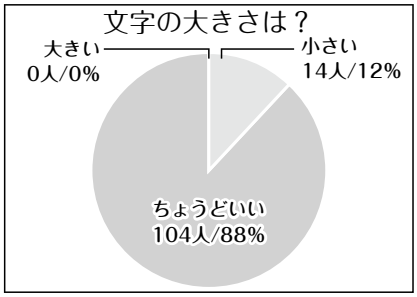
※アンケート発送数485通　回答数124通　回答率25.5％　アンケート集計：内田・林　グラフ作成：林　コメント：絵鳩

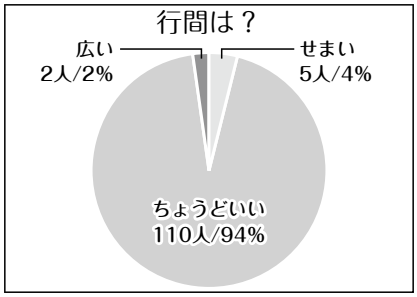
質問１「北総の里」で好きなコーナーは？

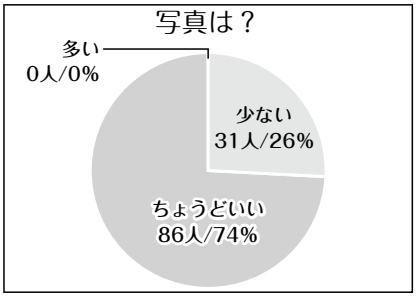


【コメント】この質問では毎号シリーズとして掲載しているコーナー（表紙、村議会だより、太田川のほとり、街道を行く、みんなの広場、その他）の中で好きなものに〇を付けてもらいました。（複数回答可）
アンケートの結果、「表紙」（68/124）、「街道を行く」（53/124）と武井園長が執筆しているコーナーの人気が高い事がわかります。表紙では「働くこと生きること」「一期一会一輪の花」「命・自然・平和」等ぶれる事のない北総精神を様々な視点から検証。「街道を行く」は日本国内だけでなく海外まで園長が実際に訪れた土地の紀行文。その土地の風土や伝統がわかりとても施設の広報紙とは思えない面白い内容が人気です。次いで「太田川のほとり」（46/124）ですが、一貫して「平和なくして福祉なし」がテーマ。その中では長崎・広島・沖縄への千羽鶴献納の取り組みも紹介。3・11の東日本大震災以降は東北の皆様に心を寄せる内容も多く掲載しています。「村議会だより」（42/124）も根強い人気コーナー。北総の里村の生き生きとした取り組みはユーモアや人間味が溢れ思わず笑ってしまう内容も多いです。「みんなの広場」（39/124）は利用者が主役の記事が中心。近年は高齢化が顕著となった利用者の様子をお伝えする事が多くなってきました。何れの記事も施設内だけの狭い視野に囚われず、読む人に何を訴えたいのか?を強く意識して毎号掲載しています。その他では長崎の近藤原理先生や沖縄の砂川先生と「平和なくして福祉なし」を日々実践されておられる方々からのご寄稿文も反響が大きく、北総のみならず読者の皆様に多大な影響を与えている事もアンケートを通してわかりました。

質問２　紙面構成について







【コメント】この質問では紙面構成について３つの質問をし、当てはまるものに〇を付けてもらいました。編集するに当たっては読者の皆様がなるべく読みやすいよう配慮しているつもりですが、どうしても掲載したい記事が多く、文字が小さくなってしまいます。写真については本紙で載せきれない分は挟み込みページを作る等の工夫をしてきました。アンケートの結果は概ね「読みやすい」という評価を頂けて一安心です。が、写真についてはカラーも検討してみては？と言うご意見もあり今後参考にさせて頂きます。

【アンケート調査を実施して】

北総育成園が開所した昭和49年から脈々と受け継がれてきた広報紙「北総の里」。その歴史は40年という長い年月に及びますが、常に「読む人に何を訴えたいのか？」を意識して紙面構成を考え編集してきました。それは初代編集長である武井園長からの教えであり、園長には毎号たくさんの時間を割いてもらい編集技術を学んでいます。書くことは時に大変しんどい事ではありますが、そこから逃げずに何回も何回も書くことで感性が磨かれ伝える力が鍛えられることも園長から学びました。

今回のアンケート調査では、そんな園長の広報紙に対する誠実な想いが皆様から高い評価を頂いている事がわかりました。施設内の行事報告だけに留まらない多岐に渡る内容は、手前味噌ではありますが毎回充実したものになっていると思います。

長崎の近藤原理先生の教えに「福祉は雑学」という言葉があります。一見福祉とは畑違いのような事でも自分の知識になれば、様々な形となってより良い支援へと繋がります。「北総の里」も読者の皆様の世界が広がるような広報紙を目指して、今後も広報委員会一同頑張っていきたいと思います。この度はアンケート調査にご協力頂き誠にありがとうございました。　（絵鳩）

街道をゆく ⑫⑦

「福祉は雑学 人とのつながりを大切に」

〝近藤原理先生からの便り〟

お歳暮 たくさんに ありがとうございました。
ご厚情に 感謝しています。「ひつじ」は 私の工夫でもあります。歩けず 事が進まないので困りますが、もう一年がんばります。広報紙、「北総」の「史や日々のでき事がわかる」って読んでいて楽しいです。但室化、七つの作業班、文化と三要件をしっかと押さえておられるところが見事です。純心大で 私のために 研究集会を開いてくれました。百数十名来てくれました。卒業生が その時使った 近況報告を同封します。皆様によろしく。

H26.12.21　近藤原理

武井敏朝様

追伸
こうぞの木の人形は この道15年の猪田君とか。7月の鹿町研の写真を送ってくださった方ですか。
絵鳩さんの三施設交流会のレポートも よかったですよ。
ジャムは 私の好物です。さっそくパンにつけて いただきます。
北総の スタッフは 皆様 すばらしい方ばかりです。
感心しています。

2014年（平成26年）12月1日（月）　毎日新聞

佐世保発！

聞き慣れた声に反応し、時折目も口も開けようとする。顔の色もツヤもいい。今にも起き上がってきそうだが、江迎中学校長の近藤真さん(57)は眠った状態のままだ。くも膜下出血で意識不明になって、2年がたつ。

2012年11月11日午後1時ごろ、近藤さんは佐世保市内の県道を横断しているところを軽乗用車にはねられた。数メートル飛ばされ、意識を失って市内の病院に搬送された。運転していたのは免許を取ったばかりの18歳の学生で、車は友人から借りたものだった。江迎中の文化祭が無事に終わった日の夜のことだった。

ほどなく近藤さんは平戸市の病院に移り、母美佐子さんも病に倒れた。美佐子さんは13年5月のこどもの日、近藤さんと同じ病院で、再び息子と話をすることなく息を引き取った。近藤さんはまだそのことを知らない。

奇跡を信じている

近藤さんの枕もとには、見舞いに訪れた人の励ましや祈りの言葉で埋まったノートや千羽鶴、江迎中の生徒たちの寄せ書きが飾られている。福祉教育を専門とする長崎純心大元教授で父の原理さん(82)と病院までご一緒した際、読ませてもらった。「早く学校に戻ってきて」「もう起きないと起こしにいきます」「何やってるんですか―？まだやる事ありますよ―！」。呼びかける言葉が多い。

約30年前の小値賀中の教え子たちも1日の同窓会の後、寄せ書きを近藤さん宛てに送った。見せてもらって胸が熱くなった。「先生の授業はユーモアがあってとても楽しかったです。後にも先にもあんな授業はなかったです。どんな時も希望をもって下さい。またあの笑顔がみたい」「小値賀の海と人を思い出して！元気になるから」

原理さんは心臓を患い腰や首に痛みを抱えながら毎週、息子に会いに行く。「いつか起きてくれると奇跡を信じているんです」。2年分の話もしたいことだろう。

佐世保支局長　井上和也

近藤原理先生近況

この道に踏み込んだのは1974（昭和49）年。手探りで〝あるべき障害者福祉〟を模索した時代。権利擁護・虐待防止・差別禁止そんな言葉は無かった。程なく仕事に行き詰まっていた頃、手にした新聞に近藤原理先生の〝なずな合宿研修〟の事が書かれていた。〝なずな合宿研修〟は毎年、8月8・9・10の三日間、長崎国見山荘で催されていた。9日は長崎に原爆が投下された日（原理先生の兄耿さんはこの原爆で亡くなられた）。初めて会った原理先生は眩しかった。以来、原理先生の教えと言葉は北総理念の拠り所。

①おおらかにこまやかにさりげなく②優しい言葉で深い思想を③自然命平和④福祉は雑学など、その言葉は常に新鮮で深い。その原理先生から年末の便り。老いに正面から立ち向かわれている先生である。

（武井）

▲原理先生を慕う原理先生のお弟子さんがなずな合宿研を引き継いだ。長崎鹿町福祉実践研究会である。北総から３名参加。車イスの原理先生を囲んで。H26.7.27

沖縄の心 ④ 完

思い 2

蒼生学園施設長　砂川　好彦

「よく見ればなずな花咲く垣根かな」気づく人は少ないかもしれないが、「なずな」は小さいけれどしっかりと花を咲かせ力強く生きている。芭蕉がなずなの花を詠んだ句です。

長崎県の近藤原理（元長崎純心大学教授）先生は、なずなの花を障がいを持つ人に例え、1962年、自宅を「なずな園」と命名、様々な障がいのある成人常時10数人と農牧の仕事をしながら2000年まで38年間共同生活を続けてこられました。その背景には、長崎原爆で亡くなった兄への追悼の念と後半生を障がい児教育にささげた亡き父、近藤益雄の強い影響があります。先生は「人は自分が元気だとつい他人も元気だと思い込みがちだが、そうすると障がい者に対しても励ましの言葉しか出てこない。これは能力主義、生産主義の発想である。相手の能力に合わせていける人間主義的な見方に発想を変えることが必要ではないか」と強調し、「それぞれの障害をその人の特性ととらえ、あるがままに受け入れ、共に生きることこそ大切なのです。」と話されます。そして悲惨な状況下で人は生きて行けないとの思いから「平和なくして福祉なし」の言葉につなげていきます。

私は、宮古島で生まれ石垣島で育ちました。その間、米軍人と出会ったことはありませんでした。19歳の時、沖縄本島（離島の人はそう言います）の那覇軍港に着きました。自動小銃を片手に米軍1個小隊が行進しているのがすぐ目に入り、ただ唖然と眺めていたのを覚えています。沖縄の現実を初めて知りました。しかし本島の人たちとの間で淡々と生活する中、その衝撃の記憶も薄れていきました。宜野湾市に住み、縁あって結婚し、さらに深い縁があって障害のある子が生まれました。この子はどうやって生きていくのだろうか、この子が成長していく中、社会はどのようになっていくのだろうか等と考えているとき、古書店で原理先生の本に出会い、長崎の「なずな合宿研」に参加しました。改めて平和について考える瞬間でもありました。

日本国の平和は、沖縄の犠牲の上に成り立っていると考えます。国民すべてが沖縄の地で24万以上の尊い命が失われたことに思いをはせてほしいと考えます。

沖縄の心とは、人間の尊厳です。命を何よりも重く見ます。そして平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心を大切にすることであります。先の沖縄県知事選、衆議院選の結果は、正にこのことを現していると思います。これが沖縄県民の心であり民意であることを感じ取ってほしいと思います。

これまで沖縄県民の一人として述べさせていただきました。この様な機会を与えてくださった武井敏朗施設長に深く感謝申し上げます。そしてまた「さざんか会」職員、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。　（完）

※武井園長の古くからの友人である沖縄県蒼生学園の砂川先生に4回に渡り「沖縄の心」と題して「平和なくして福祉なし」への真摯な思いを連載して頂きました。「沖縄の心」を通して学んだ沖縄の真実、悲しみ、願い…。それはまさに戦争のない平和な世界のたゆまない追求であり、その実現の為の具体的な実践でした。私たちも自分に何ができるのか考え行動する姿勢が必要と教えられたように思います。砂川先生、本当にありがとうございました。

▲長崎鹿町福祉実践研究会にて原理先生、砂川先生、武井園長が一堂に会し、「平和なくして福祉なし」の想いを熱く語り合った。H21.8.1

村議会だより ⑮

林産班は年明けから、その年に発生させる原木の菌打ちで忙しくなる。その原木は今年も福島会津喜多方から購入。1月14日、朝7時、雪を被った原木が到着。

1200本の原木を10tトラックから下ろす。もちろん林産班だけでこなせるものではなく、当日は男子職員にその下ろしを手伝ってもらった。

林産班の5人の利用者も一緒に原木運びをしてくれた。「来週新しい原木が届きます。手伝ってくれるかな?」と声を掛けると快く引き受けてくれた面々だ。朝も早く凍える寒さの中、雪がびっしり付いて重い原木を運ぶこの仕事は職員でもきつい。それでも手伝ってくれた利用者は白い息を吐きながら黙々とがんばってくれていた。普段の作業でも淡々と運びに精を出してくれるメンバーではあるが、今日は「林産班の仕事だ!」と言う意気込みがいつも以上に強く、とても頼もしい運び職人の顔になる。この人たちの持つ力を改めて感じる瞬間でもある。早朝から手伝ってくれた職員、利用者には園長の計らいで〝すき家〟の牛丼が振る舞われた。

菌打ち作業もこれから3月頭まで忙しい。利用者と共に「大変さ」を楽しみながら今年もよいホダ木を作っていきたい。　（菅谷）

新春 北総俳壇

◎…一席　○…二席

・散歩道 しもやけの手を 優しく握りて
「大寒の日」 白樫　久子

○寒い中　切干拡げる　手が赤い
「農耕班」 齊藤　到

・風呂介助　手が冷たいと　怒られた
「Oさんは厳しい」 林　直子

◎土を練る　かじかむ両手　白い息
「陶芸班」 興梠　孝

・ハイエース 誰が最初にぶつけるか…
「新車購入」 三浦　圭織

・大晦日　紅白観ずに　ボクシング
「いろんな大晦日があるのだ」 高岡　茂樹

・帰りたい　でも帰れない　お正月
「人生は厳しい」 篠塚奈緒美

・切干と　共に始まり　冬終わる
「今年も頑張った切干大根作り」 加瀬　裕一

・帰園日は　家族の思い出　花が咲く
「正月楽しかった」 安藤　悠果

◎昼ご飯　みんなで　食べる喜びが
ずっと続けと　毎日思う
「皆、歳をとった」 師岡小百合

・一年間　大事に育てた　良い楮
「楮収穫期は一月」 内田　沙和

◎寒くても　私は風邪を　ひくもんか
「利用者のために」 保科　智子

・空あおし　春待つ樹々や　枝はらい
「園周りは120本の桜山」 髙木　恭一

○福島から 届きし原木 被災地を想う
「原発はいらない」 杉本　和彦

○寒くても 負けずに働く 北総魂（こん）！
「働くこと生きること」 藤原　加奈

・お守りに　家族を思い　願い込め
「健康第一」 鈴木　美佳

・食べて寝て 気が付きゃ お腹が鏡餅

・自販機に 入れたお金は おさい銭
「人生思うようにはいかぬ」 菅谷　大輔

・「あしたくる？」仲間の帰園が 待ち遠しい
「またすぐケンカするのに」 絵鳩　典子

・大寒や　桜の手入れ　春仕度
「さあ、今年も覚悟の時期だ」 猪田　昌宏

選者才評

この人たちと〝働くこと生きること〟の日々を重ねて2014（26）が過ぎた。北総は今年で創立40周年の坂を上る。平均年齢50云才。皆年取った。白髪頭に禿げ頭、皺だらけの顔と手。ちちははは既に無く、年末年始の帰省も叶わず、園の暮らしを保守してくれたこの人たち。その彼、彼女が年末年始の冬の日差しの中で無心に〝働くこと生きること〟に身を置いてくれている。そんな毎日に寄り添う職員がそんな日々を活写した。興梠さん、保科さん、師岡さんを一席とした。皆下手くそだけれど心が伝わる句作に感謝したい。

（虎風山人）

みんなの広場

①「帰れない」

一月一日、新年初めての勤務。年末年始と家で過ごす人が半分。帰れない人が半分いる。「明けましておめでとうございます」と挨拶を交わすが、その中にAさんの姿がなかった。部屋に行くと、一人ぽつんとロッカー整理をしていた。挨拶もどこか寂しそうだった。「もうすぐお昼だからね」と声を掛けて私は昼食介助へ。全体のお昼が始まってもAさんは来ていなかった。今度はベッドに伏せていた。「お昼もいらない」と部屋から出てこなかった。帰れなくていいと思っている人は一人もいない。そんなAさんを目の前に、私は代わる事はできないし、いつももどかしい気持ちになってしまう。

（金子）

②Eさんの涙

12月28日の夜のこと。冬休み外泊という事で、半分近くの利用者さんが帰宅。いつもにぎやかなあざみ寮も物静かだった。そんな夜の余暇時間。Eさんと話をしていると「こっち、おかあさんがなくなったから、かえらないから」と一言。そして、だんだんと寂しさが込み上げてきたのか「おかあさんさびしいよ～！」と私に抱き付き大泣き。毎年お母さんと年越しをしていたこと、お母さんにもう会えないことを改めて実感してしまったのだろう。

（内田）

編集後記

2015年が始まりました。この編集後記を書いているのは1月26日。早いものでもう1月も終わり。年々、日が経つのが早く感じますが、きっと今年もあっという間に過ぎていくのでしょう…。日々の忙しさを言い訳にせず、利用者に心を寄せて丁寧に日々を重ねていきたいものです。

北総は冬の風物詩でもある切り干し大根作りや、新原木の菌打ち、楮の収穫と忙しい毎日です。寒い中、白い息を吐き作業に取り組む横顔はまさに「働くこと生きること」。一方で、利用者だけでなく保護者の高齢化も顕著になり年末年始帰宅できない利用者も増えてきたという現実もあります。いつも生活を共にしている仲間の不在に心が揺れ動く利用者に、私たちは何が出来るんだろう…。職員個々もそんな自問自答を繰り返しながらの冬休みでした。

今号では皆様にご協力いただいたアンケート調査の結果を掲載しています。今号の特集テーマでもある「いのち・こころ・ことばを一つに」はまさに広報紙「北総の里」が目指すものでもあります。読者の皆様、今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。（絵鳩）